
廻る想い、迎える道

彩乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廻る想い、辿る道

【Nコード】

N5162N

【作者名】

彩乃

【あらすじ】

あの日、あのハンカチを差し出すことがなかったら。

私と彼の道は、交錯しないまま、それぞれ別の人生を歩んでいたかもしれない。

だけど、私は後悔なんてしていない。

例え、愛する人と同じ道を歩くことが許されなくても。

私だけの宝物を守るため、そのことが私を支えてくれている。

あなたは今、何を想い、どんな道を歩んでいますか——？

第1章 白いハンカチ

どうしよう。頬の引きつり具合が半端ないよー。早く立ち去って欲しい…。

私は橘真梨香^{たちばなまりか}。高校卒業後、女手一つで育ててくれた母に早く樂をさせてあげたくて即行就職。

幸い在学中の成績も良く、なかなかの大手であるここ、東堂商事の受付嬢なるものになって早一年。

愛想笑いもなかなか板についてきたと自負しておりますかつこはあと。

そう、自負はしておりますが…。

これはなかなか辛い。

今、私の目の前では営業課のやり手社員、椎名和久^{しいなかずひさ}氏が延々と私を口説きやがっていらつしやいます。

ああ。疲れて言葉までおかしくなってきたー。

こちらら勤務中だというのに、取引先の人が来るのを待つ間の時間潰しだとかでしつこいにも程がる。

かれこれ10分はたっているはずなのに…。取引相手の方、一体何時に来る約束なのかしら？

いい加減相槌打つのも面倒くさくなってきました。

通常、受付には2人の社員がいるのだが、生憎今は昼休み。一年先輩の相川真紀^{あいかわまき}さんは食事に出ている。ちなみに、私は一足先に頂いてきました。

「マリちゃん。顔は笑っているのに、早くどっか行けオーラ駄々漏れ。」

ピシッと鼻の先に椎名さんの人差し指がつきつけられる。

う。ばれてらー。

「そんなことないですよ。今はお昼時で来客もありませんし、先ほどから振ってきた雨でどんよりしていましたので。椎名さんのおか

げで気分がすつきりして参りました。」

苦しすぎるかなと思いつつも笑顔で誤魔化す。

椎名さんは何故かニヤツと笑うと、腰を屈めて私の耳元に顔を寄せ…。

「んじゃ、今夜にでもベッドの上ですつきりする事しに行かない？
めちやくちや気持ちよくしてあげるよ。」

と囁きやがりました！！未成年相手になんてことを！！

さすが東堂商事きつてのプレイボーイ。

言ってることは変態親父な内容なのに、程よいバリトンボイスで告げられると、私のようなお子ちゃまは一発で腰砕けなのですよ…。

真紀さん早く帰ってきてください。15分前に席を立つたばかりの先輩に向け、心の中でえぐえぐしている間にも、目の前の不埒者は人のうなじを人差し指ですりすりしてやがります。

セクハラで訴えてもいいですか！？

互いに笑顔で攻防戦を繰り広げていると、やっと救世主が！！

「お待たせして申し訳ありません！」

急いでやってきたのか、その人は少し息を切らせたまま椎名さんへ謝意を告げていた。

その人を見た瞬間、不覚にも口をあけたまま見惚れてしまった。

東堂商事きつてのイケメン、椎名さんさえ霞むほどの造作の持ち主。さらには、180は軽く超える長身でありながら、その雰囲気は柔らかに優しい印象を相手に与えている。

「お疲れさん。大丈夫、ちょうど約束5分前だ。」

「いえ。和久さんをお待たせしたことは変わりませんから。」

二人の親しげな様子を見ると、その人の肩が大分濡れていることに気付き、わたしが「あ。」と言葉を漏らした事で、二人の視線がこちらへと向き、はっと我に返った。

イケメン二人の視線に羞恥を感じ、頬を赤く染めながらも必死で言

葉を紡ぐ。

「す、すいません。肩の辺りがずいぶん濡れていらっしやるようでしたので。」

「ああ、かなりの土砂降りでしたので。傘を差していてもあまり意味がなかったですね。」

その人は僅かに眉を下げ、仕様がなないとばかりに肩を竦めた。よく見ると、髪の手先や足元も多分に水分を含んでいた。

「せめて髪だけでも、拭ったほうがよろしいかと……」

差し出がましいかなとは思いつつ、ポケットに入っていたお気に入りハンカチを彼に差し出していた。

このハンカチが、私と彼をつなぐ大切なモノになるとは、この時の私には、思いもよらなかった…。

第1章 白いハンカチ（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5162n/>

廻る想い、辿る道

2010年10月9日06時43分発行